

内閣総理大臣 賞

## 日本のいじめ対策は間違っている

北海道 旭川市立永山中学校 2年

紙谷 桃歌 (かみや ももか)

今、日本の学校や様々な所で問題となっている「いじめ」。日本は、いじめを防止するために様々な対策を実施しています。例えば、学校側はカウンセラーの協力を得ながらいじめを受けた生徒を継続的に支援する、いじめを行った生徒には別の教室で授業を受けさせる、道徳教育の充実、などのものです。しかし、これらは本当にいじめ防止の根本的解決につながっているのでしょうか。

そもそも日本のいじめの一番の問題点は、長期間にわたって続き、陰湿化しやすい点だと思います。私は小学校五年生の頃までドイツに住んでいて、ドイツで起きていたいじめも目の当たりにしましたが、日本とは違って、暴力的な代わりに少しも長続きせず、ほとんどが一日で終わってしまうものばかりでした。では、なぜ日本のいじめは長期化しやすいのでしょうか。

それには、二つの原因があると思います。一つ目は、日本の根本的ないじめのあり方にあります。例えば、ドイツで「いじめ」といったら、大抵校庭などのひらけた場所で下級生など自分より弱そうな相手や、気に食わない相手に暴力を加えることを指します。この種のいじめは暴力的で、比較的目に付きやすいので、すぐに先生の指導が入り、長続きすることはほとんどありません。一方日本で「いじめ」といったら、暴力よりもどちらかといえば嫌がらせや集団無視などの精神的苦痛を与える行為を指します。このやり方だと、表面上は何もなさそうに見えるので、周りからは気付かれにくく、結果、先生方など学校側の対処も遅れてしまいいじめが長続きしやすくなってしまいます。

二つ目は、周りの見ている人達の反応です。私も一、二度、ドイツで上級生にいじめられたことがあったのですが、どの時も必ずそばにいた同級生や知り合いが味方になってくれて、協力していじめっ子を追い返していました。私の経験に限らず、いじめを見たら必ず周りの人達が止めに入ったり先生を呼んだりなどしていました。しかし、私が通っていた日本の学校で一度いじめが起きた時、気の毒に思いながらも誰も助けようとはせず、むしろどこか逆らってはいけないような雰囲気は漂っていました。

つまり、いじめのストッパーとなるものがなく、どんどんエスカレートしていき、長期化してしまうのです。ではどうすれば、「いじめのストッパー」になれるのか。

これは私個人の考えですが、「いじめのストッパー」になるには必要不可欠な

三つの要素があると思います。一つ目は、正しい善悪の判断ができること。二つ目は、自分の意見を持つこと。そして三つ目は、他人の意見を尊重すること。日本人はこの三つの中の一つ目と三つ目はとても良くできていると思うのですが、二つ目の「自分の意見を持つ」に関しては意識できていない人が多い気がします。

日本人は周りに合わせることを良しとするので、協調性にとっても優れているのですが、いじめの場合、この特徴は悪い方向に行きがちです。いじめは大抵一人対大勢なので、周りの人達は自然と人数の多いいじめる側になってしまうのです。こういう場合には、自分の意見を持ち、周りに流されずきちんと主張することが重要になります。私はこれこそが今の日本人が「いじめのストッパー」になるために最も必要なことだと思います。

私が通っていたドイツの学校では、クラスの誰もが最近起きた問題・もめごとを書き込めるノートがあり、毎週金曜日の最後の授業で行われる学級会議でそれを開き、書かれている内容の一つ一つを全員で話し合いながら解決していく、という活動がありました。

日本でも、こういった活動を取り入れてみてはどうでしょうか。一つの問題に対して真剣にそれぞれの意見を交流し、全員で良い方向に進めようとする。このような場をつくることで正しい善悪の判断、自分の意見を持つ、他人の意見を尊重するという能力を養うことができると思います。

今の日本のいじめ防止対策は、いじめを受けた人の救済を重視していますが、いじめを外野から見ていた周りの人たちには、あまり目を向けていない気がします。これでは、いじめを根本的に撲滅することにはつながりません。もっと生徒に自分の意見を持ち、主張させる機会を増やし、基本的人権について自分なりの意見を持たせるべきです。それが、私達が将来自分達の基本的人権を守っていくための力になると思います。

## CHILD LABOUR

福岡県 久留米市立田主丸中学校 3年

栗木 乃愛 (くりき のあ)

夏休みのある日、部活動から帰宅して、いつものように冷蔵庫に直行していた私は、台所のテーブルの上にぽつんと置かれた一枚のクリアファイルに足をとめた。それは、私の好きな絵本作家ディック・ブルーナさんのイラストがのったクリアファイルだった。描かれていたのは、一人の男の子で、私が幼い頃からなじみのあるうさぎのミッフィーちゃんではなかったのだが、「かわいいなあ。」と思いつきながら手に取った瞬間、その中央にかかれた男の子の目の下に一粒の大きなしずくが描かれていることに気がついた。「涙」だった。「えっなんで泣き顔なんだろう。」と不思議に感じて、よく見てみると、その泣き顔の男の子は、黄色い細長い何か板のようなものを何枚か抱えていた。また「えっ。」と一瞬、私はその絵の意味することが理解できず、すぐに男の子の上の方に書かれた英語の言葉を読んでみた。赤いブロック体の太文字で、「STOP! CHILD LABOUR」と書かれていた。「CHILD」は、英語の授業で習ったことのある単語だったので、「子ども」という意味だとすぐ分かった。しかし、その次の「LABOUR」はさっぱりわからなかった。でも、このときの私は、この男の子が泣いている理由をどうしてもすぐに知りたかったので、急いでとなりの部屋の本棚から英和辞書を持ってきて調べてみた。「labour」一. 労働 二. 労働者 三. 労働する とあった。詳しくみると、「骨の折れる仕事」とも書いてあった。私の頭の中は、イラストの男の子のかわいらしいイメージと「LABOUR 労働」という言葉のきついイメージがぶつかり合って、強い違和感と何とも言えない切ない気持ちでいっぱいになった。

とりあえず台所から持ってきたひんやりと冷えたジュースを飲みながら、私は自分専用のタブレット端末をひらき、そのクリアファイルの裏面にかかれたアドレスを入力してみた。するとそこは、世界中の人権にかかわるさまざまな問題やニュースの掲載であふれていた。思わず「ええっ、こんなにいろいろな人権問題があるんだ。」と、とても驚いてしまった。それぞれの問題について、国別またはトピック別に選んで閲覧できるようになっていた。そして私は、もちろん真っ先に「児童労働」と書かれた文字をタッチしてページを開いてみた。まず、あどけない表情の男の子が何かを持ち上げようとしながらこっちを見ている写真があった。つづけてスクロールしていくと、裸足や破れたサンダルをはいた子どもたちが、がれきの上でしゃがんで何かしている写真が現れた。おなじ年頃の子ども

たち同士で一緒に楽しく遊んでいるようには、私にはとても見えなかった。なぜなら、どの子の顔にも笑顔は一かけらも無く、口をくっくむすんでいて、つまらなさそうにも怒っているようにも見えたからだ。私はその写真の横に書いてある説明文を読んで、また驚いてしまった。なんとそれは、今、私が使っているタブレット、ほかにも携帯電話やスマートフォン、家庭用ゲーム機器などの電子材料に欠かせないレアメタル（希少金属）の選別作業をしている子どもたちの写真だった。私が最初、「がれき」だと思っていたのは、レアメタルの一つのコバルトという金属をふくむ鉱石だったのだ。

こうして私が何かを知りたいと思った時、どんなことでもすぐに調べることができ、見ることができ、いつも私を助けてくれるこのタブレット。クリスマスのプレゼントに両親に買ってもらったお気に入りのタブレット。でも、このタブレットの奥には、粉塵が舞う中、酷暑の中、時には命を落とすこともあるという過酷な労働環境の中で、あどけないあの子どもたちが小さな手で手掘りしたレアメタルが入っているかもしれないのだ。「遠いどこかのきれいに整備されたほこり一つない精密機器の工場で作られ、音楽の流れているきれいなお店にピカピカと並べられ、そして私のところへやってきたんだろうな。」と、ぼんやりとそこまでしか想像していなかった自分をととても恥ずかしく思った。

私は、写真の子どもたちの口を一文字に結んだあの表情、そして、クリアファイルに描かれた男の子の大粒の涙の意味が、今ようやく分かった。

説明によると、その写真が撮られた採掘場は、アフリカ大陸中央部に位置するコンゴ民主共和国にあり、この国は世界トップクラスの鉱産資源国なのだそうだ。しかし、レアメタルという莫大な富をもたらす鉱産資源の奪い合いが原因で何十年も内戦が続き、この国は、今、世界最貧国の一つとなっている。

私は悲しくなった。と同時に悔しさが込み上げてきた。なぜなら、大人達の争いによる貧困の犠牲になっているのは、私たちと同じように未来のある「子ども」なのだから。

## 輝く未来を生きるために

宮城県 栗原市立若柳中学校 3年

星 日菜 (ほし はるな)

私の家族は六人家族です。父と母，祖父母，私，そして弟がいます。今年中学一年生になったばかりのかわいい弟です。私の小さい頃からの夢は、「弟とけんかをする事」です。よく考えてみれば自分でもおかしい夢だな，と思います。でも，夢はいまだに叶えられていません。

弟が生まれたのは，平成十五年九月です。弟が生まれると聞いた時，私は飛び上がって喜びました。私もそうだったのですが，黄疸がひどく，交換輸血を三回もしました。しかし，症状は改善せず，仮死状態に陥り，一命を取りとめました。が，脳に重い障害が残りました。脳性麻痺のため弟は話す事も，歩く事も，食べる事もできません。

家族と出かける際，弟は車椅子に乗っています。すれ違った人にじっと見られたり，小さい子が，

「あの子は，何で車椅子に乗っているの。」と質問する声が聞こえることもありました。うちの家族は普通じゃないのかな。外出する度に幼い心の中で疑問が膨らんでいきました。

私が幼稚園の時です。夏祭りに家族で出かけた際，私はたくさんの視線を感じ，たまらず母親に聞いたのです。

「何で皆，かなうのことじろじろ見るの。」

「皆，かわいいねって見てるんだよ。」

残念ながら，私にはそう感じられませんでした。誰もかわいいと言わないことを訴える私に，温かい笑顔で母は答えてくれました。

「恥ずかしいから，知らない人にかわいいって言わないでしょ。私達はその分，かわいいって言ってあげればいいんじゃないかな。」

車椅子だから，人と違うから見られることや，障害を卑屈に捉える生き方ではなく，母はありのままを大切に受け入れること，弟の良さをきちんと受け止める必要性を私に教えてくれたのだと思います。

私が保育所に通っている時から，母は弟が皆に受け入れてもらえるよう努めていました。弟を見たことのない友達が，弟を見て

「この子，生きてるの？人形？」

と聞いてきたのです。母は，小さい子にもできるだけ分かりやすく，説明しました。

「大丈夫、生きてるよ。弟なんだけど、ちょっと病気で歩けないの。」

その子は「よろしくね」と弟の手を握り、弟と友達になってくれたのです。私は心から嬉しく思いました。きちんと説明することで周囲の人達が障がいを理解し、温かく受け入れてくれるよう、母は心を砕いていたのです。

私は、金子みすゞさんの詩「わたしと小鳥とすずと」が大好きです。誰もが素晴らしい長所があり、「みんなちがって、みんないい」というフレーズに、勇気をもらえるからです。障がいがあっても、私達と同じように得意なことがあり、人に元気を与えることができる存在だと、私は思うのです。

弟のチャームポイントは笑顔です。音楽を聴いている時、周りにたくさんの方がいる時、弟の表情はとても嬉しそうです。私も学校であった出来事を話してあげるのですが、弟の笑顔を見るととても元気をもらえます。弟の笑顔は、人を癒し元気を与える力があります。

私が小学生の頃、母が迎えに来る時は必ず弟と一緒に迎えに来てくれました。私は弟が大好きなので、本当に待ち遠しい時間でした。私には、障がいのことを多くの人に理解してほしい、という願いがあります。父や母もちろん同じで、弟を子ども達の輪の中に積極的に連れて行きました。障がいをもつ人達と小さい頃から触れ合うことで差別や偏見がない地域や社会になってほしい、と常々考えているからです。栄養チューブや車椅子の弟を見て、友達の中には最初「気持ち悪い」と言う人もいました。しかし、私の迎えに母と弟が姿を見せる度に、弟の周りには笑顔と人の輪が生まれました。弟の頬や手に触れ、「かわいいね」と言ってくれる友達が増えたのです。弟のおかげで私は人気者でした。両親が心配した偏見の目で見られることやいじめは、全くありません。むしろ、弟を通して病気や障がいへの理解が深まったと感じます。

弟は、私の家族にとって宝物です。弟の名前には、無事に生まれてきますようにという両親の願いが叶うよう、切実な願いが込められています。障がいがあっても弟はどんどん交流の輪を広げ強く生きています。障がいを地域や学校、たくさんの方に理解してもらい支えてもらう日々を、私達は生きています。障がいを持つ人にももちろん人権があり、命の輝きに差はないのだと考えます。弟のように障がいがあっても、自分らしく、輝ける場所を求めて頑張る人を、私はこれからも応援したいと思っています。

誰もが安心して暮らせる社会のため、障がいのある人に寄り添う日々を、私達の本当の豊かさとして大切にしていきたいです。

## ハンセン病を知って学んだこと

栃木県 宇都宮市立一条中学校 2年

東 大我（ひがし たいが）

「僕なんかその時に死んどけばよかった。」僕が母のお腹の中で何度も命が危険な状態になったことを聞いた時、母にこう言い放った。僕には吃音の障害があり、吃りを治すため今まで努力してきた。舌の病気がわかった時は舌を切って伸ばす手術もした。目の病気がわかり、メガネでの治療も始まった。なんで僕だけ…という思いが強くなり八つ当たりした。この夏、僕は見失っていた大切なことに気づき、自分の“今”を見つめ直すことができた。

一年前、偶然つけたテレビでハンセン病を知った。それは多磨全生園の敷地内にあるハンセン病資料館を紹介する番組でその事実に言葉を失った。二年生に進級したある日、また同じ番組を見た僕は、二度の偶然に驚いて、ハンセン病が気になり始めた。そんな矢先、連休に資料館に行ってみようよと、母が誘ってくれた。自分の目で確かめるいい機会だと思った僕は資料館を訪れた。ハンセン病は恐ろしい伝染病、うつると治らないと偏った考えで患者さんを一生閉じ込めた強制隔離の実態に手が震えた。狭い部屋に八人の住居、重症者の看護、土木作業等の労働、結婚しても断種・中絶を強要され、逃亡したり逆らえば監禁室に閉じ込めた。この日本でこんな信じられないようなことが行われていたのかと改めてショックを受けた。その後療養所内を散策した。納骨堂に着いた時、案内人の方から耳を疑うような話を聞いた。生まれてきた赤ん坊の口をガーゼでふさいで抹消し、ホルマリン漬けにされた三十六人の命が眠っているという。どんな小さな命でも生きたいと思って生まれてきたはずなのに生きられなかったことを思うと心臓をえぐられるような思いになり、僕なんか生まれてこなければよかったと思ったことを悔んだ。赤ん坊が眠る「尊厳回復の碑」に手を合わせ、帰宅した。

数日後、僕は再び資料館に足を運ぶ機会に恵まれた。語り部の平沢保治さんの講演会に参加することができたのだ。八十九歳の平沢さんをテレビで拝見していた僕は親しみを感じて胸が高鳴った。講演が始まると穏やかな表情は消え、強制隔離や全生園での生活等、その時の心境や思いをありのままに話して下さった。らい予防法の知識も深まった。僕と同じ十四歳で発病してから今まで受けてきた差別や屈辱は僕の想像を絶することばかりだったが、「怨念を怨念で返してはいけない」という平沢さんの生き方に強く心を打たれた。

僕は吃音がうつると言われ、手で耳をふさがれた時、何を根拠に言っているのかと悲しくて悔しくて、心がぺちゃんこになった。ハンセン病も、ハンセン病だ

と疑われただけで人として扱われない社会の暴力が行われてきたのは、病気の知識が少なかったため、必要以上に恐れられたからだ。正しいことを知らないということが心に「偏見」という壁を作り人を傷つける。その壁は僕の心の中にもある。これからは、思い込みや先入観で人を決めつけたりせず、正しいことを知る努力をしていきたいと思った。

平沢さんは僕達に三つの約束事を伝えてマイクを下ろした。①夢や希望をもってほしい。②ありがとう…と言える人間になってほしい。③この地上に一度だけ両親から頂いたこの命、どんなことがあっても大事にしてほしい…。まるで今の僕を見透かされているようで恥ずかしくなった。僕はハンセン病をテレビで「偶然」知ったと思っていたが、きっと「必然」だったのだと思う。感謝の気持ちもなく親に反発する今の僕だからこそ、聞くべきお話であったのだと、そんな気がしてならない。

講演後、平沢さんがよく来たね、何年生？と、声をかけて下さった。僕は嬉しくて少しお話しする時間をいただいた。平沢さんは、

「障害に負けないで堂々として生きていきなさい。辛い時悲しい時はいつでもこのじいさんの所に来なさいね。僕は自分の孫のように思って君を応援しているよ。」

と、僕の手を力強く握り締めてくれた。心のトゲが抜けていくのを僕は確かに感じた。平沢さんは辛い過去をお持ちのはずなのにどうしてあんなに優しくなれるのだろうか。それは平沢さんが相手の気持ちを酌み取って声をかけ、優しく接する思いやりの心を持っておられるからだと思う。思いやりのある人というのは「想像力」を持てる人ではないだろうか。例えば、困ったり悲しい思いをしている人がいたら、自分がその立場になってみて、僕だったらどんな言葉をかけてほしいだろう、どんなふうに接してほしいだろうと、相手の気持ちを想像する力を身につけている人だと思う。中学生の僕でも「想像力」を働かせることはできる。それはとてもすばらしい能力だと思う。一人ひとりがその努力をしていけば、いじめや差別は少しずつ減っていくのではないだろうか。人と人がお互いを認め合って生きていくことがどんなに大切か教えて下さった平沢さんの思いを大切に、十四歳の僕が“今”，できることをやっていきたい。



## 「小さな人権」

福島県 須賀川市立第二中学校 1年

須田 日菜子（すだ ひなこ）

私には、心に決めていることがあります。それは、どんなに小さな子供でも、大人と同じ条件で何かしようとしている時は大人と同じように扱おう、というものです。それは、私が小さなとき、あるスーパーで教えてもらったことです。

私が五歳の頃の話です。

母が不在のある日、父に連れられて幼い私と二人の妹はスーパーに買い物へ出かけました。買い物を終えたその時、母から頼まれていたティッシュペーパーボックスを買い忘れたことに父は気づきました。ところが、折悪く、小さな妹がトイレに行きたいとぐずり始めたのです。

「日菜子、お父さんの代わりにティッシュボックスを買ってくることはできるかい。」

困った父は私を頼るように言いました。

「大丈夫だよ。だからトイレに連れて行ってあげて。」

と答えた私でしたが、実際は一人でスーパーのレジに並んで会計をするなんて初めてでした。商品を見つけ、預かった五百円玉を握りしめてレジに行くと、長蛇の列です。仕方なく、並んで待つことにします。私の前に並んでいるのは、たくさんの商品が入ったカゴを持った中年の女性。後ろはちょっと怖そうな外見の男性です。大人ばかりの列に入ると、五歳の私はとても小さくて、不安気に見えたそうです。私は私で、トイレから戻ってきた父と妹たちがレジから少し離れたところで私を見守っているのを見つけ、少し嬉しくなって手を振ったのを覚えています。

しばらく待って、私の前にいた女性の会計が終わり、私はよいしょ、とボックスを抱え直し、一步前に出ようとしていました。すると、私の後ろの男性が自分のカゴをポンとレジ台におき、

「あと、たばこ一つ。」

とレジの人に声をかけたのです。私は慌てて自分の番だと主張しようと、あの、と言いました。しかし、レジの人はそのままその男性の会計をしようとしています。私が小さくて見えなかったのかもしれませんが、前後のどちらかの大人の人と一緒に思い込んだのかもしれませんが。どちらにせよ、レジは混んでいて、周りの人たちも私のことなど気にも留めていない様子でした。私はもう一度、あの、と声を出しました。ようやく、私の存在に気づいたらしいレジの人は、

「ほらそこにいると危ないよ，早くお母さんのところに行ってね。」

と言うのです。為す術もなく周りを見回し，それから遠くにいる父に目で助けを求めようとしました。しかし，父も何が起きているのか気づいていないようなのです。このままでは私の順番は永遠に飛ばされてしまう。なんだか悔しくなつて，本当に泣きそうになったその時，

「お客様の順番を間違えています。」

というはっきりとした言葉が聞こえました。そのお店の名が入ったネームプレートをつけた年配の方でした。続けてその人は，私の後ろの男の人に向かって，

「すみません，お待たせして申し訳ありませんが，こちらのお客様を先にさせていただきます。よろしいでしょうか。」

ときっちりと言ってくれました。

男の人は，あ，ああ，すみません，どうぞどうぞ，と少しきまり悪そうに言いました。どうやらマネージャーさんらしきその人は，次に，私に掌を向けながらレジの人に

「こちらのお客様に謝罪しなさい。」

と，静かに告げました。そして，五歳の私に

「失礼な対応をして，誠に申し訳ございませんでした。」

と自ら深々と頭を下げてくれたのです。

幼かった私には，その時何が起っていたのか本当に理解していたとは言えません。ただ，周りの，レジに並んでいた人たちが大きな拍手をしていたことはしっかりと記憶に残っています。

あの時，あのマネージャーさんは，五歳の私のことを，年齢や性別に関係なく，一人のお客，一人の人間として扱ってくれたのだと思います。考えると，店のお客さんの前で従業員を叱る，というのは普通，避けたいことに違いありません。でも，それよりも，私の人権を大切にしてくれた。そのことを，私は今も事あるごとに思い出しています。

子供だから，その存在に気づかなくても仕方ないだろう。子供だから，こちらのミスもごまかせるだろう。子供だから，こちらが謝らなくても言いくるめますことができるだろう。

それは全て間違いだと思います。

五歳のある日，私がああのマネージャーさんにどんなに救われたか，その日のことがどんなに心に刻まれたか。

私は小さな子供たちの尊厳と権利の守れる大人になりたい，と思っています。

## パン一つ買えない日本

香川県 高松市立太田中学校 2年

藤村 勇斗（ふじむら ゆうと）

僕たちは小さい時から同じ制服を着て学校に行き、同じ給食を食べ、同じ行動をする。同じことをすることで安心でき、なかま意識ができる。そして皆、同じことが当たり前だと思っている。それは見方を変えると一つでも違えば、つまみ出される世界でもある。こんな世界って本当に幸せなのだろうか、そんな事を感じた去年の夏の出来事がある。

僕は、母の入院のお見舞に来ていた。その日は早くから病院に来ていて、一階の焼きたてパンを買うことを楽しみにしていた。母は首の傷口から菌が入り、左顔半分が倍以上に赤くはれあがっていた。毛穴から膿も出て目もつぶれていたが、だいぶ元気になり、僕はホッとして喜んでいて。僕が昼前に、母と一緒にエレベーターで一階のパン屋へ向かい、楽しい気持ちと、母においしいパンを食べて元気になってもらいたいという思いで、店へ入ろうとした時、

「ヤベー見ろよ、あれキモッ」「あの顔すごくない？」「やばいもの見たー」「気の毒〜」と、ヒソヒソと、やりのような視線と声が聞こえてきた。あたりを見ると、振り返って見る者、わざわざ店の前に戻ってくる者、パン屋の周りは、異様な雰囲気になった。僕はトレイを取るのをやめ、代わりに母の手を取り、すぐに店を出て、人気のない電話ボックスの陰に隠れた。とっさに、どうしてそんな行動をとったのか自分でもよく分からないが母を見せたくないのか、自分が恥ずかしかったのか、ともかくそこに立っていられなかったのは事実だった。僕は、肩でハアハアと息を切らして興奮がおさまらなかった。今まで体験したことのないような圧力を感じた。身体の暴力以外にこんな暴力があるのだと感じた。そして集団の恐ろしさも感じた。母は、僕の背中をさすりながら、「ごめんよ、ごめんよ。」と、言い続けた。つぶれた目からこぼれる涙を見て、僕は我に返った。どうして母が謝るのか、どうして僕たちがここに隠れてなければいけないのか、ただ不思議を通り越して怒りに変わっていた。母は、お金を渡すから一人で行っておいでと言った。しかし、僕は、「何も悪い事はしていない、堂々とすればいいんだ。それに、一緒に行かないと意味がないんだ。」と訴えた。このままでは、得体の知れない何かを負けてしまいそうで、逃げてしまうと一生後悔しそうな気がした。母の手をまたつかみ、店へ行った。案の定、やっぱりみんなの変わった者を見るような視線が突き刺さった。震える手でトレイをしっかりとつかみ、「母さん、どのパンが一番おいしそうかなー。」

と大声で言いながら、店の中を回った。その間、どれだけの言葉や視線の攻撃を受け続けたことか。僕は、何も感じない心をわざとつくり、それを保ち続けるしかなかった。

病室に戻り、母は隣の人に僕の行動をうれしそうに話していた。ほめてくれるのはうれしいけど、自慢できる行動でもなかったと思った。

僕は、窓の外を見ながらパンを食べた。この雲一つない青い空の下、いったいどれだけの人が自由に外に出ているんだろう。美しい物を見て美しいと感じ、甘いおいをかいで笑顔があふれ、心地よい音楽を聴いて、心はずむ。本当に全ての人ができるのだろうか。誰もが自由に楽しむ権利はあるはずなのに、僕達は自分と違う者を除外したがる弱い気持ちがある。同質の者は受け入れるが、何か変わっていると、変わり者、別物とみなし、なかまに入れたがらない。歴史的にも特に江戸時代には厳しい身分制度や差別があった。しかし、もう時代は変わったのだ。僕は、一人一人がもう少し心に一センチでもいい、異なるものを受け入れるすき間をつくってほしい。容姿、障がい、人種や宗教等、異なるものを受け入れて認める心を少し広げれば解決できることなんだ。全ての間人は同じように幸せに生きる権利がある。そして、それを奪う権利は誰にもない。みんな平等で、自由でなくてはならない。自分の認めた者だけが幸せというのは、本当の幸せじゃないんだ。異文化、異民族等異質のものを認め受け入れる広い心が一人一人にあれば、この青い空の下もっと多くの笑顔と笑い声が聞こえてくるはずだ。そんなことを考えながら食べたチョコクリームたっぷりのパンが少しにがく感じられた初夏の一日だった。

## なぜ、祖父母と向き合えないのか

埼玉県 狭山市立中央中学校 3年

齊藤 美沙子（さいとう みさこ）

私には、八十代の祖父母がいます。けれど、恥ずかしいことに長い間、きちんと向き合うことが出来ませんでした。

祖父は認知症がかなり進んでいます。「美沙子だよ。おじいちゃんの孫だよ。」と言っても「みさこ。あれっ。ええと……。」となかなか分かってもらえません。そのようなやりとりが続くと次第に私は不安になります。祖父の部屋に飾られた私の書初め作品も、誰が書いたものなのか分かっていないそうです。このまま忘れられてしまったら。そう思うと、段々と自分から話ができなくなってしまいました。

祖母は両足の股関節の手術をしているために杖なしでは歩行できません。だからこそ私が優しく声をかけたり、手を貸してあげたりしなければいけないという事は分かっています。分かっているのですが、「何だか照れくさい」という気持ちに負けてしまいます。さらには、いずれ自分もこのように体を動かさなくなるのでは、という恐怖さえも覚えてしまい、ますます自分から手助けをすることが出来ずにいました。

そのような祖父母ですが、幼い頃の私はよく面倒をみてもらっていました。おんぶや抱っこはもちろんのこと、一緒にトランプやオセロで遊んでもらったり、お弁当を作ってピクニックに連れていってもらったり、おままごと用のいすを作ってもらったりと、とにかくたっぷりの愛情を注いでもらいました。それなのに、なぜ自分は手を差し伸べることができないのでしょうか。不安や悲しみ、照れくささ、そんなことで二の足を踏んでしまう自分がとても情けないです。

そんなある日のことです。朝、いつものように新聞を読んでいると、投稿欄に私と同じ中学三年生の投稿を見つけました。私は、同じ年齢の人が投稿していることにも驚きましたが、何よりもその内容に強く心を打たれました。彼は幼い頃に祖父母を病気で亡くし、会いたくても会えない。恩返しをしたくてもできない。それはまさに私自身の未来を予言しているかのようでした。

「このままでは絶対に後悔する。祖父母と話せることは、それだけですごく幸せなことなんだ。」

変わろう。特別なことでなくていい。自分から声をかけたり、手をさしのべたり。当たり前のことを当たり前のように、今までの恩返しが少しでもできるように。変わろう。そう決意しました。

それから一ヶ月が経ち、祖父母の家に修学旅行のお土産を渡しに行きました。祖父は生八つ橋を口にしながら何度も「こりゃあ美味しいなあ。ありがたいなあ。」と喜んでくれました。また祖母は、昔、夫妻で清水寺を訪れた思い出を懐かしそうに話してくれました。隣では「そうだそうだ。」と祖父も嬉しそうに頷いて、母も含めて四人で京都の思い出を語り合い、とても楽しいひと時となりました。

そうそう、忘れられないすてきなエピソードがもう一つ。祖父の部屋に飾られた私の書初め。それを見た祖父が「こりゃあうまいなあ。誰が書いたのだからやあ。」と言いました。

「みさこが書いた〈素直な心〉っていう字だよ。」

「そうかあ。人間は素直で正直が一番大事だいなあ。それから、人から信頼される人間になりたいなあ。」

それを聞いて私は、今まで誰のか分からずにただ飾っているだけ、とふてくされていた自分が恥ずかしくなりました。心を込めて書いた字は祖父の心にもきちんと届いているのだ、と。

「あれっ、みさこっていうのは、俺の新しい嫁さんだっけかやあ。こんなに若くてかわいらしい嫁さんがいたのじゃあ、俺もあと少しだけ頑張るかな。」

冗談なのか本気なのか、祖父の言葉は皆を笑顔にさせてくれました。

人は少し記憶することが困難になったり、体が不自由になることがあります。けれど、それだけで人の価値が決まるわけではありません。大切なのは心が健やかであること。優しさと思いやりの心を持った祖父母は私の誇りです。祖父母の力になりたい、と思っていました。実はまだまだ祖父母から学ぶことのほうが多いと今では感じています。

近頃、ご近所の高齢者の方と話す機会が増えました。先日は九十九歳のおばあちゃんが自分で育てたお野菜を持って来て下さり、私の曾祖父にお世話になって感謝していると話してくれました。「人から信頼される人間になりたいなあ。」と言った祖父の言葉を思い出しました。私も曾祖父のように人から信頼される人間になりたいと思うと同時に、常に感謝する気持ちを忘れないこのおばあちゃんのように年を重ねていきたいです。

## 感謝

高知県 須崎市立須崎中学校 3年

村上 一矢 (むらかみ かずや)

僕は、母のお腹にいる時に「水頭症」という病気になり、生まれてすぐに手術をしましたが、ずい液がもれたことで足先に神経が通わなくなりました。そのため、生まれたときから、足首の感覚がないという障害があり、何も持たずに立つことができません。今は、生活のほとんどの場面で車椅子を使っています。生まれた時から障害があったので、僕自身はあまり気にしたことはありません。

保育園の時は、車椅子を自分でこぐというのは無理だったので、あまり使うことはありませんでした。使っても大人の手を借りることがほとんどでした。僕は、車椅子を使うよりも、家の中や保育園を這ったり、上半身だけの力で移動したりしていました。僕は、みんなと遊びたいという気持ちが強く、みんなも一緒に遊んでくれました。外で遊ぶことも多く、その姿を見た祖父が僕のために靴を買ってくれました。そのまま履いてもすぐに脱げてしまうので、脱げないように工夫もしてくれました。僕は、その靴のおかげで、みんなと外で遊ぶことができました。

小学校に入学し、学校での生活が始まりました。小学校では、担当の先生がついてくれて、移動など補助をしてくれました。車椅子の使い方に慣れていなかったのですが、たくさん迷惑をかけたと思います。でも、僕がみんなと同じように学校生活を送れるように助けてくれました。

今、小学校生活を振り返ると、僕はたくさんの友達にも支えられてきたと思います。最初は、「どうしたか。」と、聞かれましたが、すぐにみんなは障害に関係なく接してくれました。僕が何も言わなくても動いてくれたり、僕が何か頼んだ時は、嫌な顔やめんどくさい顔など一切せず、助けてくれたりしました。僕は、本当に嬉しかったです。友達や先生がいたから、足に障害があっても、みんなと同じように六年間運動会に出ることもできました。また、六年生の時には、修学旅行に行って楽しい思い出を作ることができました。

中学校でも同じです。僕は、たくさんの友達と先生方に支えられ、今、生活を送っています。僕は周りの友達や先生方、両親、祖父母にとっても感謝をしています。それは、障害がある僕に、普通に接してくれているからです。

でも、僕は来年の三月には中学校を卒業します。友達や先生が、いつまでも当たり前のように、僕のそばにいるわけではありません。これからは、一人ですることを増やさなければなりません。今、僕の周りにはいる友達は、僕のことを分

かってくれているので、何も言わなくても動いてくれます。しかし、高校や社会に出れば、今までのようにはいきません。今でも、時々、周りが知らない人ばかりの時や、人混みに入った時などは、自分から、「すみません。」と、声をかけなくてはいけない場面もあります。僕はまだまだ一人で生活を送ることに対して不安がありますが、今まで僕を支えてくれたみんなのためにも頑張ろうと思います。

僕は今、車椅子バスケットをしています。きっかけは、小学校五年生の時の担当の先生が、障害者スポーツセンターのイベントがあることを教えてくれ、それに参加したことです。色々なスポーツを体験しました。そのイベントが終わった後、今僕が所属しているチームの高知シードラゴンズに声をかけてもらいました。初めて練習に参加した時は、車椅子同士がぶつかる場所や、車椅子ごとこけたりする様子を見て怖かったことを覚えています。また、シードラゴンズのメンバーが僕より年上の人ばかりだったので、打ち解けるのに時間がかかりました。でも僕は、車椅子バスケットが大好きで、どんなにしんどくても練習を休んだことはありません。他のメンバーにも支えられ、今では色々な試合に出ることができるようになりました。初めてシュートを入れることができた時は、本当に嬉しかったです。僕は、車椅子バスケットに打ち込むことで、自信もつきました。これまで、人前であいさつをしたり、発表をしたりすることが苦手でしたが、勇気を出して挑戦してみようという気持ちを持つことができるようになりました。

僕の今の夢は、二〇二〇年の東京パラリンピックに出場することです。とても大きな夢ですが、僕は目標を持って努力し、その夢を絶対に叶えたいと思います。今まで僕を支えてくれた周りの人たちに、僕の活躍する姿を見せたいと思います。

今まで支えてくれた友達や先生方、両親や祖父母、車椅子バスケットのメンバーへの感謝の気持ちを伝えるためにも、夢を実現できるよう、頑張ります。



## 私を生きる

東京都 新宿区立四谷中学校 3年

上田 倫子（うえだ りんこ）

七・六パーセント。この数字を聞いてあなたは何を想像するだろうか。これは日本の人口の左利きの人やAB型の人割合にもほぼ一致する数字だそう。しかし、今から話そうとしていることは決してそのようなことではない。実はこの数字は、ある団体が調査した日本のレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーなどの性的少数者の割合なのだ。この数字を多いと捉えるか少ないと捉えるかは人それぞれだが、私はとても多いように感じる。私の周りだけでも左利きの人やAB型の人は何人もいる。それを性的少数者の人数に置き換えて考えてみると、性的少数者は、認識されていないだけでかなりの数がいる、ということがわかるだろう。

ここ最近、メディアでのオネエブームやジェンダーフリーの風潮によって、性的少数者とそうでない人との壁は徐々に低くなりつつあるようだ。しかし、抱き合っただけでじゃれる同性どうしの友だちを見て、同級生が

「おまえらホモかよ。」

というような発言をしたり、女っぽい話し方やしぐさが目立つ男子を笑ったりするということはまだ見られる。このような時、私は非常に残念な気持ちになる。それらの言動には、無意識であれ性的少数者を差別する心が表れていることを感じてしまうからだ。

私は生まれてきたときに女性という性を受けた。しかし、物心ついたときから、常に男女どちらの性でもいたい、という気持ちを持っている。フリルやリボンのついた女の子らしい物があまり好きではなく、スカートを履くということも恥ずかしかった。小学生の頃は、クラスの男の子のように一人称が「俺」だった頃もあった。しかし、成長するにつれて周りの女の子の友だちが綺麗に、おしゃれになっていくのを見て、自分が女という性で生まれてきたことへの喜びも感じられるようになった。そして、いつしか自分の心の中に男性のようにも女性のようにもありたいという二つの思いが存在するようになった。そのことを自覚したとき、目の前の霧がぱっと晴れたような気持ちになったことを鮮明に記憶している。それと同時に、「どうしよう」という不安と戸惑いの気持ちが芽生えた。「自分はおかしい人間なのだろうか」という問いが頭の中をぐるぐると回った。このことを打ち明けてしまったら、両親、祖父母、親戚、親しい友だち、全ての人が私と今までのように接してくれなくなるかもしれない、と一瞬恐ろしくなったのだ。

私がこのような不安と戸惑いの気持ちを抱いたのは、人間は誰でも自分とは違うものを否定したくなる性質を持っていると私自身が考えているからだ。そのような性質は性的少数者だけではなく、有色人種、障がい者、在日外国人などへの差別意識にも通じていると思う。ではなぜ、そのような差別意識が育ってきてしまうのだろうか。私は、原因は家庭環境や幼い頃の経験にあるのではないかと考えた。人間の成長していく過程で幼少期は、保護者や身近な人の影響を受けやすい時期だ。そういった時期に家庭内や学校などでの会話や雰囲気端々に差別意識が存在すると、その情報を一気に吸収し、自分の考えの一部となってしまうのではないだろうか。

今の私には、自分の性の認識への恥ずかしさは全くない。それはきっと、私の育ってきた環境や様々なものとの出会いが影響している。思えば私は小さい頃から両親を通じて多様な人との出会いがあった。その中には数人の同性愛者の男性もいて、いつもありのままに堂々と生きるその姿を私はとても美しいと感じた。また、私の大好きな女性ミュージシャンは両性愛者だ。彼女は自身の曲や生き方などを通して人と違うことは誇りに思うべき個性なのだと教えてくれた。その他にも、本やインターネットから知り得た性的少数者についてのことなど、すべてが私に「身体は女でも心は両性」という性のあり方を「一つの個性」という風に思わせてくれた。

昨年十一月には、渋谷区で同性カップルに同性パートナーシップ証明書を発行するという制度が作られた。これにより同性愛者だけでなく様々な性的少数者に対する社会の理解が深まっていくだろう。しかし、差別意識というものを完全になくすのは実際にはかなり難しいことだと思う。かく言う私も「あなたは今、差別意識を全く持っていないのか。」と問われるとすぐに「はい。」とは答えられない。だがこの多様な世界を生きてゆく中で私たちには、自分の思う「普通」が世間の「常識」なのだという考えを捨て、新たな視点を持つことのできる柔軟な姿勢が求められるのではないだろうか。そして人を性別や見た目で判断せず、その人の持つ「その人らしさ」を一つの「個性」として、受け入れることのできる世の中になってほしいと思う。どんな個性を持っていたとしても、その人は「かけがえのない人」に変わりはないのだから。

## 僕の色から見たこと

長野県 学校法人松商学園松本秀峰中等教育学校 2年

木山沢 奏斗（きやまざわ そうと）

私には先天性の色覚異常があります。「色覚」とは色を識別する感覚のことで、そこに異常が生じています。例えば赤と緑，緑と茶，オレンジと黄緑など区別のつきにくい色があります。そしてそのことで見え方が正常な人と少し違うということが色覚異常です。先天性の場合は原因が遺伝的なものなので現時点では有効な治療法はありません。けれど先天性の色覚異常は日本人男性の5%，女性の0.2%の頻度で起きていて男性では20人に一人と言われています。私が色覚異常だとわかったのは小学二年生の時でした。

「奏斗の龍だけ違うよ。」

ポツリと友達が言いました。それはクラスで龍の子太郎の物語から自分の好きな場面を描いてみよう，という図工の授業をして，出来上がった作品を先生が廊下に飾り終えた時のことでした。私には友達の言っている意味が理解できませんでした。廊下にならんだみんなの絵は様々な表情のそれぞれの龍の子太郎と母龍でどれ一つとして同じ龍ではなかったからです。

「どこがちがうの？」

と，とっさに理由を聞けなかった私はこの日の出来事を母に話しました。数日後参観日があり，母が見つけてくれました。

「この前言っていた龍の子太郎，みんなの龍は緑色をしてたけど奏斗の龍は茶色だったからかもしれない。」

色覚異常とわかった時，眼科の先生は

「心配いらないよ。みんなと少し見え方がちがうだけだよ。」

とやさしくおっしゃいました。けれど私は

「みんなと見え方がちがうってみんなはどう見えるんだろう。」

と心の中がもやもやして気になって仕方ありませんでした。きっと私は「みんなと違う」ということが不安で怖かったからなのだろうと思います。もしかしたらいじめられるかもしれないと思っていたのかもしれないかもしれません。そんな時，父が

「みんなと違っていいじゃないか。奏斗はみんなの見えない色が見えるようになるかもしれないぞ。」

と言ってくれました。私はこの言葉に何か特別なものが見えるようになる気がして少し心が救われました。

あれから六年が経ちます。眼科の先生が言われたように時々，色に迷うことが

あっても生活そのものに何も不便はありません。けれど私はこのハンディキャップを通じて、自分が思っている以上に他人を気にしている弱い自分と向き合うことができました。最初は友達がどの絵の具を選んでいるかを確認してから自分もその色を選んでいました。でもだんだん自分から

「これ何色？」

と聞けるようになり、そのうちに

「いや。自分の見たままを塗ろう。」

という気持ちに変わっていったのです。少しずつですが私は自分自身を受け入れることができたのだと思います。父は

「見えない色が見えるようになる。」

と言いました。それは

「違いのある一人一人の人間を認められるようになれ。」

と伝えたかったのかもしれませんが。世の中には人種、性別、障害などの様々な違いに差別されることがあります。けれどそもそも人間は誰一人として同じではありません。私は胸をはりありのままの自分で生きていきたいと思います。そして相手のありのままもよく知って、受け入れていきたいと思います。人権を尊重するということはお互いのありのままを認め合うことではないでしょうか。まずは身近な友達の中に信頼関係を築いていくことから始めていきたいと思います。

## 大分，今日も元気です

大分県 大分大学教育学部附属中学校 3年

佐藤 千慧（さとう ちさと）

ガッ，ガッ。寝ている私の体の芯を突き上げるような揺れ。「ピーピー，地震です，地震です」緊急地震速報が追い打ちをかけるように，恐怖心を駆り立てる。もうやめて，と何度も何度も心の中で叫んだ。

熊本・大分地震から，約四か月が過ぎようとしている。体から，やっと揺れの感覚や，耳の奥でくりかえす，緊急地震速報は鳴り止んだ。しかし，その日々の中で，日に日に大きくなっていくものがある。それは，四月十四日の熊本・大分を地震が襲った，次の日の出来事だ。

「お一人様，一つまでとさせて頂いております」「一家族様，お一つまでです」そんな言葉が飛び交う。朝一番，普段はすいている道も，車で埋め尽くされていた。みんな，必死だった。今夜も地震は来るかもしれない，という底知れぬ恐怖を相手に，必死になっていた。そしてまた，私もそのうちの一人だった。姉と買い出しに来た私は，まずは水を確保するように，と言われ，販売コーナーを目指した。そこで，私が見たものは，目を光らせて我先に，と水をカートに入れている人々だった。お店の人が，次から次へと在庫を出しているが，陳列よりも，陳列棚からなくなるスピードの方がはるかに速かった。「すみません，今日の在庫はこれまでにになります」その言葉を聞くと，群がっていた人々は早足でさっさと退散していった。

「どうしようか…。」

小さく，ため息交じりに腰の曲がったおばあさんがつぶやいていた。人だかりの中，このおばあさんが，水を買うことができなかったのだろうと，容易に想像できた。しかし，私の腕の中には，一つのペットボトルしかない。家族のために必要な一本。だから，簡単にはこれどうぞ，とは言えなかった。悩んでいる私の横を大学生くらいの男の人が通り抜けていった。彼が行った先には，あのおばあさんが。

「どうぞ，俺，ほかの店行くんで。」

そう言って何のためらいもなく，おばあさんに水を差し出していた。

「ありがとう。腰が悪くて，やっと歩いてきたんだけど，水も買うことができなくてね。どうしよう，って思っていたんだよ。助かったよ，本当に，本当にありがとう。」

おばあさんがほほ笑むと，男の人は照れくさそうに，人混みの中に消えていった。

ほんの数秒のこの出来事が、私の中で日に日に大きくなっている。

私は、この経験を通して、私自身は、自由に歩いたり、逃げることができる。しかし、見渡してみると、出会ったような、腰の悪いおばあさんや、杖を使って歩いている人、車椅子に乗り、膝にかごを乗せて買い物をしている人も知った。このような人は、地震の時私以上に、どこに逃げたらいいのだろう、停電して、足元が見えない状況で、不安で、立ち尽くしてしまうのではないかと、思った。自分も危うい状況、恐怖はあるけれど、その中で、私の出来ることは、避難所に行く際、隣の家のおじいさんとおばあさんに声を掛け、隣を寄り添いながら、歩幅を合わせ、歩くこと。避難所で毛布を配る時に、ただ配るだけでなく、笑顔も配ること。できることは限られているけど、前向きに行動することが、その限界の壁を少しでも壊していける、と私は考えた。

「ここどうぞ。」

「ありがとね、その気持ちがとてもうれしいよ。」

四月の地震は、決して無駄にはしない。地震を経験したことで、私は学んだ。先日、私は初めてバスの席を譲った。きっと今までの私なら、迷いやためらい、わざわざ自分から関わりに行く事はないだろう。行動に移すことはなかっただろう。しかし、四月十五日の経験が私を後押しし、自分から、積極的に関わりを持ち、行動に移すという選択肢を選ばせた。実際に行動してみると、日常生活で生かしていけることは、たくさんあるのだと実感したし、自信がついた。そして何より、私が席を譲ったおばあさんの柔らかい笑顔は、私の次の行動への力と、勇気をくれた。

四月十五日。この日は、私の人生の大きな分岐点となった。災害は自然が相手のため、止めること、人間が太刀打ちすることはできないかもしれない。しかし、対策をとること、人と人とが手を取り合い、心を寄せ合うことはできると学んだ。今回の地震の風評被害で、温泉県である大分は、一時はキャンセルが相次ぎ、にぎやかだった観光の通りは、静かになった。しかし、そんな地震に負けないくらい、温かい人が多い場所、心が休まるほっこりできる場所、笑顔のパワーがみなぎる場所、それが大分県。大分、今日も元気です。